

東京国際映画祭

錦織監督

映画の現場から



●○○37

先月までの暑さがうそのようにめっきりと秋らしくなった10月20日、第25回東京国際映画祭が初日を迎え、東京・六本木ヒルズにあるハイアットホテルの関係者やゲストの俳優陣が控える会場に、「渾身」KONISHIN」チームが集めた。

主演の伊藤歩さんはこの日、着物コーディネートをしていのお母さんにみたくてもらったあでやかな着物を着た。緑色を基調に落ち着いた大和なでしこぶりで、映画の中の多美子とは違う爽やかさはその場をひととき華やかにしている。

そして青柳翔くんは、モントリオール世界映画祭のチェアマンお墨付きの端正なマスクと長身で紋付きはかま姿がピタリとはまっている。彼の立ち姿を見ていると時代劇が撮りたくなってくるほど。

私もおそろいの紋付きはかまのいでたち。日本男児でありながら結婚式以来となる和装を反省しつつも、

隠岐のイケメン力士に注目

紋付きに身が引き締まる思い。

そして何よりもわざわざ隠岐の島から駆けつけてくれた隠岐のイケメン力士の面々が衆人の注目をさらう。まわし姿がりりしい。行司役で出演していただいた門脇さんや英明のモデルになった池田さんたちをはじめ、呼び出しや力士など映画にも出演いただいた「役者たち」が勢ぞろいし

てくれたのだから、こんなにうれしいことはない。

いよいよハイアットの車を寄せにずらりと並んだプリウスに分乗してスタートラインに向かう。グリーンカーペットは150坪。まず依田チェアマンとあいさつを交わしいよいよスタート。行司の門脇さんが六本木中に響き渡るほどの良い声で口上を始めると、そこに集まっているみんなが何

事が始まったのかと「渾身」KONISHIN」チームを凝視する。見事な口上。映画化に向けて多くの協力者の皆さんと時を共にしてきたことを昨日のことのように思い出す。

いよいよ公開に向けてカウントダウンが始まったのだとあらためて感慨深い思いがした。モントリオールでの数々のミラクルの時の感動とは違う、隠岐の島の皆さんと歩くカーペットはまた格別だ。池田さんの相撲甚句に手拍子を合わせ「どすこい、どすこい」とカーペットを進んでいく。多くのインタビューを受けながら。前田敦子さんが前を歩いているのが見える。

たくさんの俳優さんや華やかな衣装をまとった多くの芸能人たちの中で、わが力士たちのまわし姿が一番かっこよくクールだったと自負している。島への思い、故郷を愛する思いがあふれる若者たち。島から駆けつけてくれた皆さんこそ本物だ。その思いを映画にできたことを心から誇りに思う。みんなと一緒に歩いて一生の思い出となった。

(錦織良成・映画監督)

＝第2、4金曜掲載＝



グリーンカーペットに並ぶ「渾身」KONISHIN」チーム